

## 「言語活動の検証改善の成果」について (平成27年度「言語活動の充実に関する実践研究」の取組を踏まえて)

※本資料は、平成27年3月26日教育課程企画特別部会において配付された資料「『言語活動の検証改善の成果』について」に加筆・修正を行ったものである。

文部科学省では、平成28年3月14日、平成27年度「言語活動の充実に関する実践研究」の取組を踏まえて、有識者で意見交換を実施。各教科等を通じた言語活動の成果や課題等を把握するとともに、言語活動の充実のために必要となる方策や今後の方向性等について、意見交換を行った。

### <意見交換の概要及び今後の方向性>

#### 1. 言語活動の位置付け

現行学習指導要領（平成20年・21年告示）においては、各教科等の指導に当たっては、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育む視点から、各教科等を通じた言語活動の充実を重視。

- ・知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのもすべて言語によって行われる。習得、活用、探究のいずれの場面においても各教科における学習活動の基盤となるのは言語の能力である。また言語はコミュニケーションや感情・情緒の基盤でもあり、豊かな心を育むことや人間関係を形成する上でも重要。
- ・平成20年中央教育審議会答申では、言語活動を中心に、思考力・判断力・表現力を育むために各教科で必要な学習活動として以下の6点を示し、これらの学習活動の基盤となるものは、広い意味での言語であるとした。
  - ① 体験から感じ取ったことを表現する
  - ② 事実を正確に理解し伝達する
  - ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
  - ④ 情報を分析・評価し、論述する
  - ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
  - ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる
- ・こうした力の育成は、国語科だけで取り組むものではなく、すべての教科で取り組まれるべきものである。国語科において培った言語に関する能力を基本に、各教科における教育の目標を実現する手立てとして言語活動の充実を図ることが求められている。
- ・言語活動の重要性は、現行学習指導要領において初めて求められたものではなく、従前から、国語科をはじめ各教科等において学習活動の重要な要素として取り組まれてきたものである。

## 2. 成果と課題

### <成果や取組状況>

- ① 多くの小・中学校で言語活動を意識した活動に取り組んでいる。全国学力・学習状況調査の結果等からは、言語活動の充実が児童生徒の学力の定着に寄与していることが示唆されている。

#### 【小学校】

- 指導方法・学習規律について、27年度に新たに調査した項目では、「授業で扱うノートに、学習の目標とまとめを書くように指導した」学校の方が、全ての教科で平均正答率が高い傾向が見られる。
- 指導方法・学習規律について、27年度に新たに調査した項目では、「授業において、児童自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れた」学校の方が、全ての教科で平均正答率が高い傾向が見られる。

#### 【中学校】

- 指導方法・学習規律について、27年度に新たに調査した項目では、「授業において、生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れた」学校の方が、教科（国語B、数学A、数学B、理科）の平均正答率が高い傾向が見られる。  
(平成27年度全国学力・学習状況調査より)

### <課題>

- ② 言語活動についての目的意識や、教科等の学習過程における位置づけが不明確であることや、指導計画等に効果的に位置付けられていないことにより生じている問題が指摘されている。
  - ・授業や単元の中で明確な意図を持った位置付けがされておらず、単なる話合いにとどまっていたり、ホワイトボードやICTを使うことに終始して形骸化しており、言語活動自体が目的となっている例
  - ・発表や討論に重きが置かれる一方、その前段階として、自分の考えを持たせるための論述等の活動や、発表の後に様々な意見や考えを比較・検討してまとめていくことが十分に行われていない例
- ③ 授業の中にグループでの話し合いや発表の場面を設けることに負担を感じている教師や、言語活動を行う時間を確保することが困難と考えている教師が少なくないという指摘がある。

### 3. 言語活動の今後の方向性

- ① **各教科等の教育目標を実現するため、見通しを立て、主体的に課題の発見・解決に取り組み、振り返るといった学習の過程において、言語活動を効果的に位置づけ、そのねらいを明確に示すことが必要である。各教科等の目標と指導事項との関連及び児童生徒の発達の段階や言語能力を踏まえて、言語活動を学習過程の中に計画的に位置付け、アクティブ・ラーニングの視点から授業改善を図っていくことが求められる。そのために、各学校における教科間の関連や学年を超えた系統的で計画的な言語活動が実施されるよう、カリキュラム・マネジメントを適正に行うことが求められる。**

#### (各教科の学習の過程への位置付け)

- ・ 言語活動を行うこと自体が目的ではなく、各教科の教育の目標を実現するための過程において、観察、実験、計算などと同じく様々な学習活動の一つとして、「その活動で何を実現しようとするのか」という観点から、授業の中での言語活動の位置付けを一層明確化していく必要がある。
- ・ 言語活動は特定の教科のみにおける取組ではなく、各教科を通じて取り込まれるものである。各教科特有の概念や用語の使用や特性も踏まえつつ、例えば数学的活動(数学的な表現を用いて根拠を明らかにし筋道立てて説明し、伝え合う活動)や、理科や社会などの問題解決的・探究的な活動など、各教科の学習の過程において、言語活動を効果的に位置付けることが必要である。
- ・ 教科横断的な視点を持ち、カリキュラム全体のマネジメントの文脈の中で考えていかなければならない。カリキュラム・マネジメントは、管理職だけでなく、一人一人の教員が意識しなければならないこと。
- ・ グローバル化の中で、多様な情報を活用すること、異なる視点から考えること、力を合わせたり交流したりすることなど、他者と協働して取り組む学習活動がますます重要になる。
- ・ ホワイトボードや ICT 等の思考ツールを使うならば、どのような場面でどのようなツールが有効かを意識すれば効果的ではないか。

#### (目標の設定、見通しと振り返り)

- ・ 育むべき資質・能力には、一時間で身につく力もあれば、長期的な見通しをもって検討すべきものもあることを踏まえて、一単位時間の授業、単元、年間の指導計画を考える必要がある。
- ・ 言語活動が単なる活動とならず、学びを深めるものとするためには、授業の冒頭に見通しを持たせ、最後に振り返りを行うことが重要であることの理解を徹底する必要がある。
- ・ 教師側では授業の初めに目標を示しているつもりでも、児童生徒はそう受け止めていないことが少なくない。(全国学力・学習状況調査質問紙調査から)
- ・ 教師が児童生徒にどのような資質・能力を育てるかという観点から「指導の目標」を立て、それを児童生徒の学習の「見通し」のレベルに落とし込むことが必要である。

### (評価)

- ・ 目標に準拠した評価、指導と評価の一体化が必要である。評価規準が教員一人一人  
で異なるものとならないよう、学校全体で共通理解を図った上で設定していく必要が  
ある。
- ・ 言語活動は、目標実現の手立てであるから、評価の直接的な対象ではない。言語活  
動を通じて思考・判断した過程や成果を目標に照らしてとらえ評価していくことが必  
要である。
- ・ 言語活動が、実際に子供達の学びをどのように質的に変化させたのかを長期的に観  
察することができれば良い研究の成果となる。

### ② 言語活動により時数の確保が難しくなるという見方もあるが、学年等を超えて長期的に言語活動を行う能力の育成を積み重ねていくことにより、一層効果的で効率的な学習が可能となるという視点も重要である。

- ・ 言語活動を行う前提として、発達段階に応じて言語活動を行う上で必要な能力の  
育成（語彙の獲得、概念の獲得など）を図ることが必要。
- ・ 課題解決的な探究学習につなげていくためには、幼児期、小学校低学年において  
は、体験したことから素朴な疑問をもつということの重要性を再認識する必要がある。  
る。
- ・ 小中高等学校の各段階で、どのような言語活動が、どの程度できるようになって  
いるとよいか、児童生徒の実態と発達段階、身に付けるべき資質能力の面から分析  
して設定していくことが必要。
- ・ 「言語活動を取り入れると時間がかかるため、教師が知識を教えていくことが効  
果的・効率的」という考え方では、「思考力・判断力・表現力の育成」という教育の  
目標は達成できない。
- ・ 継続して言語活動に取り組み続けることで、児童生徒の言語活動を行う能力が高  
くなるとともに、言語活動を意識することにより目標・内容と学習活動の関係が明  
確となり、言語活動を取り入れた方が従来よりも学習が早く進み、結果として学習  
に要する時間が短縮できるという考え方を重視することが必要である。
- ・ こうした取組に関して、国や教育委員会は、広く事例等を収集し、留意点や配慮  
事項について検討することが必要である。
- ・ 言語活動の充実のためには、読書活動を重視することも重要。基礎的な「読む習  
慣」をつけるとともに、多くの情報を吸収し、それを資料化することにより、現代  
的な課題に答えられるのではないか。

### ③ 教員の資質向上も含め、学校が全体として取組を進められるよう、教育委員会や大学等による支援や環境整備等を行いながら、今後さらなる充実が図られるようにしていくべきである。

- ・ 言語活動を含め問題解決的な学習の指導方法に関する教員の指導力向上が必要。  
そのためには学校全体で言語活動の充実に取り組むことや、教育委員会や大学等  
による研修等による支援も従来以上に必要。
- ・ 学習指導要領において、各教科の特質に応じた示し方を行うこと、教育目標・内  
容と教育・学習方法、評価を一体的に示すことなど、学習指導要領全体の構造にお  
ける言語活動等の学習・指導方法の示し方についても検討すべき。

- ・ 都道府県として取組を行う際は、各学校の学力の実態を認識し、どのような言語活動に関する事業を行うのかを明らかにし、学校の実態を踏まえて子供をどのように育成していくのかという発想が必要。

#### <言語活動の充実に関する取組の良い事例>

- ・ 県全体の組織的な取組を基盤に、「課題（めあて）設定→言語活動→まとめ・振り返り」という学習の過程により、言語活動を生かして各教科の授業のねらいを達成するとともに、総合的な学習の時間においても言語活動を効果的に生かしている中学校の事例
- ・ 問題解決に必要な手順、学習の手法や思考ツール、解決に向けて思考を深めるための見方・考え方、論理的言語能力を児童の発達段階に応じて身につける取組を行っている小学校の事例
- ・ 総合的な学習の時間や特別活動を通して言語活動に取り組み、「考えて→言葉にして→振り返る」という学習の過程を身につけさせ、目の前の各教科の指導だけでなく、教科を超えた学びを目指して探究的な学習を推進している高等学校の事例・特別活動における言語活動についての研究に取り組むことで、生徒指導上の問題行動が解消され、学力面でも大幅に向上したという事例
- ・ 年間指導計画で、目標・内容・評価を一体化して記載している例
- ・ 学校司書と司書教諭が連携・協働し、様々な読書指導・利用指導を行い、学校図書館を活用した計画的な授業作りに取り組んでいる例
- ・ 特別活動での話合いが深まるとともに、教科等の授業の話合いも活発になった事例。

#### ○意見交換出席者（平成28年3月14日文部科学省において実施）

佐藤 真 関西学院大学教育学部教授  
 田中 孝一 川村学園女子大学教育学部児童教育学科教授  
 寺井 正憲 千葉大学教育学部教授  
 永田 潤一郎 文教大学教育学部准教授  
 宮川 八岐 國學院大學人間開発学部兼任講師

（50音順、敬称略）

#### ○作年度の意見交換出席者（平成26年10月10日、10月31日文部科学省内において実施）

恩田 徹 京都市立堀川高等学校長  
 岸田 薫 横浜市教育委員会西部学校教育事務所指導主事  
 佐藤 真 関西学院大学教育学部教授  
 佐藤 俊之 秋田県能代市立能代東中学校長  
 高木 展郎 横浜国立大学教育人間科学部教授  
 田中 孝一 川村学園女子大学教育学部児童教育学科教授  
 永田潤一郎 文教大学教育学部准教授  
 三田 一則 豊島区教育委員会教育長  
 宮川 八岐 國學院大學人間開発学部教授 （50音順、敬称略）